



334/334 (1972) /
トマス・M・ディッシュ
(増田まもる訳)/サンリ
オ(文庫・8/5刊・¥560)

『334』は、未訳の長編『強制収容』(六八年刊)と並ぶ、ディッシュの代表作である。

ニューヨーク東十一丁目に聳える、高層集合住宅、第334号——本書では、半ばスラム化した“334”を舞台に、その住人である登場人物たちの生活が、六編のオムニバス中、短編に、淡々と描き出されている。

錯綜した時間構成を持つ作品である。ただ、これだけの人物が描写されながら、人間としての印象は妙に希薄だ。誤解のないよう付け加えておくが、これは本書の欠点ではない。むしろ逆に、作者の意図と考えられる(六十年代の外挿でもある)。二十一世紀初頭の混沌とした状況を、人物のちよつとしたしぐさなど、細部に重点を置いて表現しているのだ。かつて、ディッシュの短編「リスの檻」が発表されたときには、“新しい波”ともてはやされる一方、文学の浅薄な模倣だとの批判も結構強かった。『334』は、そういう不毛な議論を超え、“小説的価値”を充分に内包しているようだ。

訳文には、少々問題点もある。けれども、難解なディッシュの大作が出版されたこと自体、素直に喜ぶたい。(俊)